

国立病院機構熊本医療センター

No.234



くまびょう NEWS

NHO KUMAMOTO MEDICAL CENTER KUMABYO NEWS

発行所
国立病院機構熊本医療センター
〒860-0008
熊本市中央区二の丸1番5号
TEL (096) 353-6501(代)
FAX (096) 325-2519



JICA 集団研修 “包括的なウイルス肝炎対策 Comprehensive Countermeasures for Viral Hepatitis”

2016年10月7日より10月28日までJICA集団研修“包括的なウイルス肝炎対策”が行われました。エジプトより4名、パキスタンより2名の研修員が参加しました。

エジプト、パキスタンではC型肝炎が主で、感染者は全国民のそれぞれ6%および8%と高率です。現在C型肝炎治療はインターフェロンベースからDAAと呼ばれる直接作用型抗ウイルス薬へと大きな変化を遂げ、ウイルス駆除率は90%以上を達成しています。しかしながらウイルス肝炎に対する予防および治療に関してはまだ大きな障碍 (obstacle) が存在しています。国民の肝炎に対する理解、新規感染機会の軽減、肝炎ウイルス検査法の整備と受検率の向上、輸血供給体制、医療費助成制度などです。またデータベースの整備と

国内での情報ネットワーク構築が今後重要になってきます。さらに肝硬変あるいは肝がんに行進した患者に対する治療も重要な課題です。

我が国ではこれらの問題に対して包括的な総合肝炎対策を推進し、大きな成果を上げています。そこで昨年から新たに医療行政も含めた“包括的肝炎対策”として研修コースを開始しました。3週間におよぶエキスパートによる講義と見学研修は研修員より高い評価を受けました。まだ見直すべき課題もあり、さらにより良い研修にすべく努力したいと考えています。今回の研修員6名は熱心ながら和気藹々と研修を受け、各々が自国での実情に応じた行動計画を策定し、セミナーは成功裏に終わりました。今後の計画の成果が期待されます。関係の皆様には心より御礼申し上げます。

(消化器内科部長 杉 和洋)

基本理念

最新の知識・医療技術と礼節をもって、
良質で安全な医療を目指します。

運営方針

1. 良質で安全な医療の提供
2. 政策医療の推進
3. 医療連携と救急医療の推進
4. 教育・研修・臨床研究の推進
5. 国際医療協力の推進
6. 健全経営

患者様の権利

1. 良質かつ適切な医療を公平にうける権利があります
2. ご自身の医療について理解しやすい言葉と方法で十分な説明と情報を受ける権利があります
3. 病院から説明と情報を得た上で、自らの意志で治療を受け、あるいは選択し、拒否する権利があります
4. 自分の診療記録の開示を求める権利があります
5. セカンド・オピニオンを求める権利があります
6. 個人としての人格の尊重とプライバシーの保護を受ける権利があります



「窮すれば即ち変ず、
変ずれば即ち通ず」

さくら病院

院長 大塚 裕一

さくら病院（医療保険型療養病床：164床）は、熊本市東区（桜木町）から益城町方面に延びる丘陵地帯に在ります。益城熊本空港インターやグランメッセ熊本にも近く、眼前に阿蘇外輪山が広がる恵まれたロケーションに加え、設備も一新して快適な入院生活の提供に努めています。更に、多様化するニーズに対応すべく、人工呼吸器30台・透析装置25台・各種監視装置と共に豊富な知見とスキルも有して、もう一つの自慢です。

前任地（牛深市民病院）でも、国立病院機構熊本医療センターの先生方にはドクター・ヘリの運用も含めて、日頃から大変お世話になって居りました。臨床研修協力施設に名を連ねていたことから、地域医療研修の先生達との交流もあって、楽しい思い出

として残っています。

7年振りに、天草から戻ったら地震に遭いました。震源地にも近く、惨状を目の当たりにして、何か出来ることは無いかと模索して参りました。病院は、新築だったこともあり、復旧も早く、業務に支障を感じませんでした。即日、透析が再開出来ましたので近隣の透析医療機関に呼び掛けを行い利用して頂きました。また、施設で罹災された入居者の方々に、旧棟の一部を提供して役立つことも出来ました。然し、当院の職員の多くが震源地に居住していたこともあり、車中泊の職員も多数居りました。各々が抱え込む諸事情や心配事にも拘わらず、業務を遂行しています。

被災を契機として（寧ろ、背中を後押しされて）、連携室長を兼任しています。私共の持てるポテンシャルを医療資源として活用し、パンク寸前の急性期病院に“日頃の恩返しを、少しでも出来れば”との思いから、多少の無理をしても受け入れる方向で調整しています。

決意に願ひも込めて「タイトル」としました、お酌み頂ければ幸いです。



第22回 国立病院機構熊本医療センター医学会の開催と演題募集のご案内

第22回国立病院機構熊本医療センター医学会が2017年1月14日（土）に国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センターにて開催されます。

例年通り病院全体の職種が参加し発表します。

開放型病院登録医の先生方にも是非ご発表頂きたく演題募集をさせていただきます。

応募方法は演題抄録をCDRまたはUSBメモリに入れて下記宛てにご送付頂くか、e-mailにてご送信下さい。多数のご参加をお待ち致しております。

抄録提出締切日：2016年12月9日（金）

- 抄録の文字数は全体（演題名、所属、発表者、共同演者、本文）で600字以内にしてください。
- 本文は【目的】【方法】【結果】【総括】、症例報告は【目的】【症例】【経過】【考察】にそって記述して下さい。
- 図表の使用はできません。半角カナは使用できません。
- 尚、発表は原則としてPCで、使用ソフトはパワーポイントで作成したものに限りです。
- 発表時間は6分、討論3分です。
- 参加費は無料です。

お問い合わせ・送付先：〒860-0008 熊本市中央区二の丸1番5号

国立病院機構熊本医療センター医学会実行委員 臨床研究部長 芳賀克夫

TEL：096-353-6501 FAX：096-325-2519 E-mail:scott@kumamed.jp

職場紹介

防災センター

新築移転から7年目を迎えるようとする防災センターをご紹介します。ボイラー技師長とボイラー技師の職員2名と委託社員7名で担当しております。昼間は長野、佐藤、村上の3名で、夜間と休日を委託された社員にて管理しております。今回、4月の熊本地震を大規模災害という立場から、日頃災害訓練を行ってきた一員として貴重な経験と実績ができたと思います。防災センターをフル活用して、情報の収集と故障箇所の改善に当たりました。



(九州三建サービス)
委託社員 大久保 和久

(九州三建サービス)
委託社員 井芹 伸一

(九州三建サービス)
電気主任技術者
村上 聖一

ボイラー技師
佐藤 孝一

ボイラー技師長
長野 和也

いくつかの反省も残りましたが夜に発生したにもかかわらず、1時間前後の参集は何よりの経験でした。これからは高齢化とともに全面委託されればまた新たな問題も出てくるかもしれませんが、これからも皆様のご理解とご協力を賜りますよう宜しくお願い致します。
(ボイラー技師長 長野和也)

平成29年度 専修医（後期臨床研修医）を募集します

総合医として活躍する若い医師の育成を専修医制度により行なっています。この制度は高い専門能力と幅広い臨床能力を兼ね備え、患者中心の医療を実践する臨床医を育成するためのものです。自分の専門能力を高めるために関連する分野を幅広く選択することが可能で複数の専門医資格を取得することが出来ます。

1. 特色

- 高い専門能力と幅広い臨床能力とを持つ臨床医を育成します。
- 自由度の高い選択プログラムが用意してあります。
- 医療人としての全人的研修に力を入れています。
- 病院間の交流研修を行なっています。
- 国際的な交流研修を行なっています。

2. 専修医のコースについて

- 内科系総合専修コース、外科系総合専修コース、救命救急専修コース

3. 研修期間

3年間（希望により5年間）

4. 応募締切

平成29年1月31日（火）

問い合わせ先（応募される方は事前に下記までお問い合わせ下さい。）

〒860-0008 熊本市中央区二の丸1-5 国立病院機構熊本医療センター 事務部管理課給与係長 馬場
TEL 096-353-6501（代） FAX 096-325-2519 E-mail 613jy01@hosp.go.jp

※研修内容についての問い合わせ 教育研修部長 大塚忠弘 E-mail otk@kumamed.jp

アドバイザー・コミティが行われました

去る10月25日（火）、本年度第1回目のアドバイザー・コミティを開催いたしました。アドバイザー・コミティは、地域の急性期中核病院としての当院の診療機能の充実と当院の理念である「最新の知識・医療技術と礼節をもって、良質で安全な医療」の推進を図ることを目的に、外部委員の医師の皆さまから忌憚のないご意見を頂戴する会議です。今回、7名の外部委員の先生方にご出席をいただき、ご意見を伺いました。病院側は、河野院長をはじめ幹部職員、各診療科の部長又は医長、その他事務局の総勢25名が参加しました。話題提供といたしまして、福元整形外科医長より「最小侵襲の人工股関節置換術を目指して」、辻総合診療科医長より「総合診療科の紹介」についてお話頂きました。その後、意見交換が行われ、外部委員の皆さまから、多くの貴重なご意見、ご指導を頂きました。ご意見の一部と当院の回答をご紹介させていただきますと次のとおりです。「共同指導用紙の返却方法をその都度とするのか、郵送等でまとめて返却するのかどちらかに統一してほしい」→回答「院内で統一を図る」。「治療後の転院先が患者家族の希望する病院でなかった。入院時に希望の有無を聞いてほしい」→回答「希望はお伺いするようにしています。ご希望に添えなかったのは、当院のミスで申し訳なかった」。「時間外に小児患者を紹介する際に、小児受入可能なベッドの空床状況を把握しておいてもらいたい」→回答「すぐに対応したい」。「開放型病院連絡会での症例提示において、短時間でもよいのでもっと数多くの症例提示や最新治療の情報をいただきたい。また、質疑応答の時間を設けてもらいたい。シャトルバスや総合診療科の情報な



アドバイザー・コミティの様子

ど開始してからではなく、計画があるということ連絡会の席で情報提供すれば、もっと周知が行き届く」→回答「限られた時間の中での開催につき、難しい面もあるができるだけ努力したい」。「受付職員がパソコンばかり見ていた。もう少し目を見て対応してもらえると良かったと、紹介した患者様からご意見があった」→回答「委託職員であっても職員と同じ。日頃から接遇に努めるよう言っている。再度徹底する」等々でした。また、熊本地震の際には、避難所から送った患者様を快く受け入れてもらい感謝している。紹介センターで電話受付を開始してもらって非常に助かっているというご意見も頂戴いたしました。その他頂戴したご意見につきましても、参考にさせていただき、診療機能のさらなる充実を図りながら、病院運営に活かしてまいります。外部委員の先生方におかれましては、診療のお忙しい中、ご参加いただき誠にありがとうございました。（管理課長 清水就人）

緩和ケア研修会が行われました

当院主催の緩和ケア研修会が、10月29日、30日に行われました。秋晴れの穏やかな陽光の差し込むホールに、22名の様々な職種（医師、看護師、管理栄養士、MSW）の方々が集まりました。疼痛などの身体症状への対処法や精神面のケアを、ロールプレイやグループワークを通して学びました。



グループワークの様子



参加者で記念撮影

特に地域連携のセッションでは、病院から在宅診療にどうつないでいくかを具体的に話し合い、充実した内容になりました。また診療者同士が顔見知りになる場となり、参加者にはそれぞれの成果を持ち帰って頂きました。（腫瘍内科医長 磯部博隆）

「リレー・フォー・ライフ・ジャパン 2016 くまもと」 に参加しました

例年初夏に行われるこのイベントも今年は震災の影響もあり10月29日30日に熊本市の白川公園でリレー・フォー・ライフ・ジャパン2016くまもとが行われました。熊本では今年で6回目になりますが、当院のチームとしては2回目の参加です。ボランティアの職員41名でタスキをリレーしたり、ブースではがんの療養に関する情報を発信しました。公園中央ではがんを経験した患者さんとの意見交換を行い、生の声聞かせて頂きました。また夕刻からのルミナリエでは灯火一つ一つに想いのメッセージや励ましのメッセージが浮かび、幻想的な中にも医療者としては身の引き締まる思いでした。

最後になりましたが、ご協力いただきました事務部・参加いただいたボランティアの方々ありがとうございました。
(腫瘍内科医長 榮 達智)



タスキリレーの様子



リレー・フォーライフ会場の様子



リレー・フォー・ライフとは

1985年一人の医師がトラックを24時間走り続けアメリカ対がん協会への寄付を募りました。「がん患者は24時間、がんと闘っている」という想いを共有し支援するためでした(リレー・フォー・ライフ・ジャパンHPより)。現在ではアメリカのみならず、世界20カ国以上に輪が広がっており、日本でも2006年に1回目が開かれ、昨年度は全国43か所で開催されている啓発・チャリティーイベントです。

看護学校が創立70周年を迎えました

平成28年10月17日に「創立70周年記念講演会」を開催いたしました。創立から70年、この間、2634名の卒業生が巣立られました。その卒業生は、国内及び国外も含めて広い分野で活躍しています。今回の記念講演会講師である小山珠美先生も卒業生です。小山先生は、NPO口から食べる幸せを守る会理事長としてご活躍です。また、JA神奈川県厚生連伊勢原協同病院看護師であり臨床実践家として後輩の育成にも尽力されています。さらに、摂食・嚥下多職種協働による臨床研究や執筆活動にも取り組まれています。



小山珠美氏
(卒業生29期生)



在校生120名および職員の集合写真

今回の講演会は「私のナースングマインド～あきらめず乗り越える強さ～」というテーマで始まり、人間が活着している限り「口から食べる」ということを諦めず支援し続ける信念を語っていただきました。

これからも、「自主・責任秩序・融和」の精神を引き継ぎ、実践能力とともに人間性あふれる看護師養成に努めてまいります。

(看護学校教員 石井美香子)

国立病院総合医学会が沖縄県で開催されました

去る11月11日・12日に第70回国立病院総合医学会が沖縄県宜野湾市で開催されました。本学会は、全国の国立病院機構病院、国立ハンセン病療養所が一堂に会して、国民により良い医療を提供すべく、議論する貴重な会議です。今年には九州医療センター院長の村中光先生が会長を務め、テーマは「医療構造の変化と国立病院に問われる役割」でした。特別講演では、生物資源研究所所長の根路銘国昭先生が、「加速するウイルスと癌ゲノムの進化に如何に立ち向かうべきか!？」という演題の講演をされました。地球の誕生から、ウイルスの誕生、生物の進化、がん遺伝子の制御、最新の癌治療と壮大なスケールの話をお聞きすることができました。また、もう一つの特別講演は、大相撲の行事第36代木村庄之助である山崎敏廣様が「努力は実る」という講演をされました。相撲業界でのさまざまな裏



国立病院総合医学会会場の様子

話・苦労話を聞くことができました。

この他、シンポジウムやポスター発表も数多く行われ、日常診療に関わる多くの課題が議論されました。当院もさまざまな職種の方が63題の発表を行い、大いに存在感を示すことができました。

(臨床研究部長 芳賀克夫)

研修医マッチングが公表されました

この度、平成28年度マッチング結果（29年度に研修開始）が公表されました。総合臨床研修プログラム（15名定員）、プライマリケア臨床研修プログラム（3名定員）及び歯科臨床研修プログラム（2名定員）のいずれも例年どおりフルマッチしました。医科では熊大学生が9名でその他は九州内外の6大学から9名、歯科では九州歯科大生をはじめ2名がマッチしました。最終結果に先立って公表された中間発表（一位研修先希望者数）では29名が当院を希望し、大学を除く一般研修病院の全国900施設以上のなかで第24位、九州地

区では飯塚病院（30名）に次いで2位と多数の医学生が当院での研修を強く希望してくれました。

また、歯科では8名の応募者があり競争率4倍の難関コースとなりました。臨床研修教育病院としての総合力を評価されたものであり、当院の指導医の先生方をはじめ全スタッフのご協力、また、地域医療研修でご協力頂くご施設の先生方のお蔭に他成らず、厚くお礼申し上げます。今後とも研修指導をよろしく願い申し上げます。

(教育研修部長 大塚 忠弘)

電子カルテがバージョンアップしました

平成28年10月22日（土）午前0時から8時まで電子カルテシステム（富士通HOPE/EGMAIN-GX）を停止してバージョンアップ（V06よりV07）が行われました。システム停止の間、救急車搬入を停止し皆様にご迷惑をおかけしました。また、りんどうネットワークの公開も停止いたしました。

午前8時に無事システム復旧し、不具合事項もほとんどなく翌月曜日の外来診療ができました。今後のバージョンアップやリプレイス時にご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

(放射線科部長 吉松俊治)



熊病の歴史

臨床工学技士

近年の医用工学の発展に伴い、様々な医療機器が開発され使用されるようになってきました。そして生命維持装置などの医療機器を扱う国家資格の必要性が高まり1987年に臨床工学技士法が成立し、翌年に第1回の国家試験が行われました。

当院における臨床工学技士の歴史は2000年に田代博崇が採用されてから始まります。九州管内の国立病院としては九州医療センターに次ぐ二人目の採用でした。当時は心臓血管外科の開心術における人工心肺装置の操作と非手術日には当時6床しかなかった透析室で業務を行っていました。また持続的血液ろ過透析(CHDF)などの急性血液浄化の他に人工呼吸器の点検や、ICUにおける補助循環装置の管理などを一人で対応しておりました。翌2001年には川内直、2003年には新木信裕が採用されました。このころには透析室も9床に増床していました。また末梢血幹細胞採取や骨髄濃縮といった血液内科の業務に携わるようになったのもこのころでした。2004年の独立行政法人化と同時に竹本勇介が採用され、その後透析室が10床となり、2006年には高気圧酸素治療装置が稼働を始め、その操作も臨床工学技士が担うこととなりました。そして2009年に新病院で透析室が10床から20床に増床するのに伴い北川哉と佐藤朋哉が採用されました。

少し戻りますが2007年の医療法改正で医療機器安全管理責任者の配置とそれまで曖昧であった医療機器の保守点検が病院に義務付けられました。しかし当時はまだ旧病院の手術室の隅を間借りして人工呼吸器と一部の輸液ポンプ・シリンジポンプの医療機器の中央管理を細々と行っている程度で、まともな点検はスペースの関係上できませんでした。今では中央管理が当たり前の輸液ポンプ・シリンジポンプや低圧持続吸引機のほとんどがまだ病棟管理でした。ところが新病院で

はME機器室が確保され、当院でもやっと医療機器の中央管理と点検などを行うことができるようになりました。

2013年から脳神経外科と整形外科の手術で運動誘発電位(MEP)のモニタリングを業務として開始しました。当時は6名体制だったため手が回らなかったことも多々ありましたが、2014年に森永良和と松下尚暉の2名の増員が決定し8名体制となり、依頼がきたMEP業務のほとんどを行えるようになりました。また同年の4月から特定集中治療室管理料の施設基準に臨床工学技士が常時院内に勤務していることが追加されたことから当直が始まりました。当直が行える最少の定員数が8名であり、何らかの事情により1名でも欠員がでると当直ができなくなり施設基準を満たさなくなってしまう。そこで2015年に久原亮希を採用し9名体制としました。残念ながら同年に川内直が退職しましたが、2016年に清元玲を採用し現在に至っています。

また2014年に田代博崇が当院で初の臨床工学技士長に昇任すると同時に、それまで麻酔科部長が任命されていた医療機器安全管理責任者も臨床工学技士長が務めることとなりました。これでやっと当院において臨床工学技士が一つの部門として認められることとなりました。所属がそれまでの麻酔科から救命救急科に変更されたのも同年のことです。

臨床工学技士は他の医療関係の資格に比べて非常に歴史が浅く、当院の歴史の中でもほぼ21世紀に入ってから足跡しかありませんが、今後も増え続ける医療機器に柔軟に対応し、信頼される部門を目指して成長していきたいと思っています。

(臨床工学技士長 田代博崇)

最近のトピックス

精神科の取り組み セルフケア支援活動や 自殺危機介入など



精神科医長
橋本 聡

開放型病院登録医の先生方におかれましては、平成28年4月の熊本地震以来、平素にも増して大変お世話になりました。先生方始め、地域の様々な方に支えられ、当院は救命救急センターとしての役割を果たすことが出来ました。感謝申し上げます。今回は当院精神科が取り組んでいる活動についてご紹介させていただきます。

まず、震災に関連して、救急外来受診記録を後方視的に調査しました。平成28年4月14日から同21日までの期間（震災急性期）、延べ981名の方が当院救急外来を利用し、その中で、何らかの精神科の問題を有したのは164名でした。101名は、認知症高齢者や慢性期統合失調症患者など、精神症状は安定しているが肺炎・外傷などで加療を要した方たち。活発な精神症状を呈していた患者（A群）も63名いて、うち身体的問題を有していたのは7名、すべてが自殺関連行動でした。A群で何らかし身体加療を要したものは12.7%、これは本年3月（平時）における63.8%を大きく下回りました。A群の発生頻度は平時の3.74名/日から、震災急性期9.0名/日と急増。受診者総数が激増したため比率としては小さくなるのですが、注意を要すべき方が急増していたことが分かりました。これまで知られてい

なかった情報であり、現在取りまとめを進めています。

震災後、皆さまの施設と同様、スタッフの疲弊、消耗は重大な問題となっていました。このため、当科では河野院長発令のもと、職員のセルフケア支援を実施いたしました。看護、ロジ、心理部門と協働して院内研修会・講演会を開催しました。また、トラウマ治療のスペシャリストたちの協力も得て、「セルフケアサポートチーム：熊本」を立ち上げ、院内外の対人援助職の方たちがセルフケアの方法を学び、そして身近な方や利用者へ応用して頂けるような企画を継続いたしました。特にTFT（思考場療法）が好評なため、来年3月にも追加で講習会を企画しています。

震災前より自殺危機介入は当科の重要な仕事のひとつでした。ACTION-J研究と呼ばれる、日本発のRCT研究の結果、救命救急センターからケースマネジメント介入を開始することで、有意に自殺企図を減少させることが確たることとなりました。早速、厚生労働省が重要事業として実施施設を募りましたので当院も参加し、平成27年度から、退院後も継続的なモニタリングを実施することに取り組んでいます。熊本精神科協会も協力くださっていますので、新しいエビデンスを先生方に届けられるように頑張りたいと考えています。



看護、ロジ、心理部門と協働して開催された院内研修会・講演会の様子

いま、国立病院機構
熊本医療センターで
何が研究されているか

シリーズ110回

病棟看護師の治験業務に関する理解および
今後の改善を目的としたアンケート調査について

治験センター 高野由樹

入院して治験薬を投与する治験において、プロトコルからの逸脱なく安全に治験が行われるためには、病棟看護師の協力が必要です。このような治験を当院で実施する場合、治験内容についての資料を提供し治験コーディネーター（以下CRC）による病棟説明会を開催したり、また医師その他関連スタッフが集まるスタートアップミーティングに参加を依頼するなど、病棟看護師がよりスムーズに治験業務を行えるように努めています。しかし、通常の業務とは違う治験特有の対応もあるため、病棟看護師に理解して頂くには難しい点もあるかもしれません。治験の内容を正しく伝達するために、CRCの今後の取り組み方について検討を行いましたので報告します。

【目的】

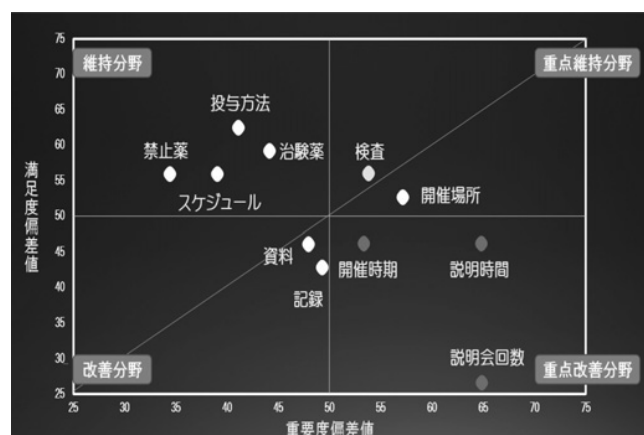
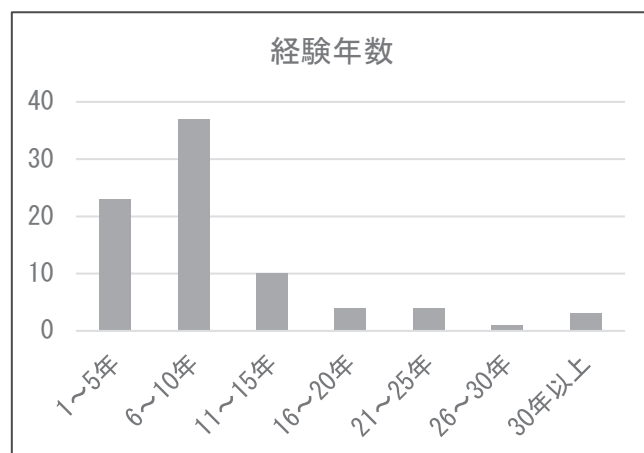
現在行っている治験の病棟説明会を評価し、今後の改善点を見出すため、病棟看護師を対象にアンケート調査を行いました。

【方法】

当院に勤務する病棟看護師517名を対象にアンケート調査を行いました。評価した各項目の満足度をCS解析し、改善すべき項目を抽出しました。

【結果】

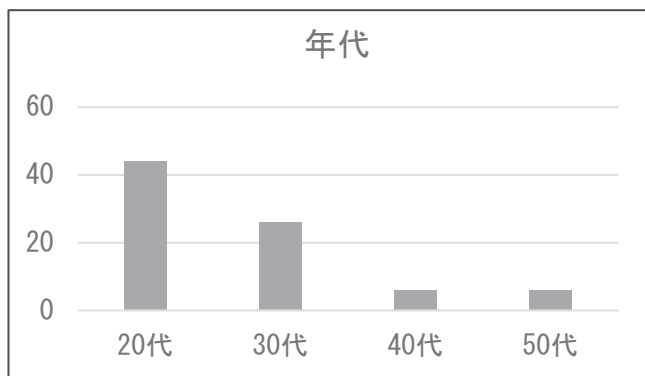
アンケートの回収率は58.2%（301名）であり、その内、病棟説明会の参加経験者は16.0%（83名）でした。総合評価を「理解できましたか」としたところ、現行通りの対応でよいと思われる項目として「治験薬について（治験薬の特徴など）」「治験薬の投与方法」「治験のスケジュール」「併用禁止・併用注意薬」の4項目が高い満足度を示している事が分かりました。対



応を見直し改善が必要と思われる項目として「説明会の回数」「説明会の時間」「説明会の開催時期」の3項目が抽出されました。

【考察】

今回のアンケート調査で満足度が高い「治験薬について（治験薬の特徴など）」「治験薬の投与方法」「治験のスケジュール」「併用禁止・併用注意薬」の4項目については現状通りに対応し、改善が必要な「説明会の回数」「説明会の時間」「説明会の開催時期」の3項目については、病棟の交代勤務に合わせて説明会の回数を増やしたり、短時間でも治験の内容を理解してもらえるような資料の作成、病棟看護師が集まる時間の前後に説明会を組み入れたり工夫する必要があります。近年は治験の内容が複雑になっておりますが、それに対応し、安全に治験が実施できるよう、今後も病棟と連携をとりながら改善策を検討していきたいと考えております。



研修医レポート

臨床研修医

うしじま しんや
牛嶋 真也



こんにちは。研修医1年目の牛嶋真也と申します。大分大学医学部をこの4月に卒業し、熊本医療センターにて研修をさせて頂いております。研修を始め、はや6ヶ月が過ぎました。医師としての環境によりやく慣れ始め、日々たくさんのスタッフ、指導医の先生方に支えていただきながら精一杯がんばっております。

僕の医師としての一步は血液内科から始まりました。当院は特に血液内科の症例が多く、またその中でも移植の症例が全国的にも上位の症例数があり、自分も何度も移植の現場を経験させて頂きました。はじめて自分が担当する患者の治療に携わり、その過程をみるこ

とができ、自分が医師として働きはじめた実感を感じました。

血液内科にて研修中、熊本地震が発生しました。たくさんの方が来院する中、自分はただ言われるがままに動くことしか出来ず、無力感を味わいました。そんな中、2年目の研修医の先輩方は率先的に行動しており、自分も2年目の時にはそのような医療をできるような医師になろうと強く思いました。

2つ目の科は呼吸器内科を研修しました。呼吸器内科では最初に患者個人を全体的に見ることの大事さを学びました。一人一人の問題点、その原因、そしてその解決方法を考えることが患者全体を見ていることであり今後の医師として働いていく上での基礎としてとても大事なことを学ぶことが出来ました。

その後、外科、麻酔科と研修をさせて頂いております。それぞれの科でさまざまな手技を学んでいます。少しずつではありますが、麻酔での全身管理を理解してきており、今後の研修に生かしていきたいと思っております。

これからさまざまな科でご迷惑をかけると思いますが、精一杯がんばり、少しでも役に立てるよう努力していきたいと思っております。これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

臨床研修医

ふるもと たかふみ
古本 嵩文



こんにちは。研修医1年目の古本嵩文と申します。長崎大学を卒業し、4月から熊本医療センターで働かせていただいております。私はこれまで25年間長崎で生活してきて、初めての熊本の生活ですが、少しずつ熊本の地名もわかるようになってきました。研修生活としては、早いもので、もう半年を過ぎましたが、わからないことだらけで指導医の先生方や、他のスタッフの方々にご迷惑をかけてばかりの日々を過ごしております。

4月からの研修生活は血液内科で始まりました。開始1週間後には、熊本地震が発生し、医師として何もできない自分の非力さを実感したと同時に、動揺もせず患者さんを診察されている2年目の先生を目の当たりにし、自分の1年後を不安に思った時のことが懐かしく感じています。その後血液内科の通常勤務に戻ってからは、化学療法中の患者さんの感染コントロール、移植患者さんのGVHDなどの様々な副作用への対応を勉強させて頂きました。また、CV、PICCの確

保、骨髄穿刺等多くの手技を経験できた2か月でした。

次は、循環器内科を回らせていただきました。毎日のように運ばれてくる心筋梗塞の患者さんの緊急カテーテル治療や心不全の患者さんに対する薬物治療等多くのことを学びました。循環作動薬に関しては、何科に進もうが必要となる知識であり、心不全の初期対応は、今後救急外来でも生かしていかななくてはならないと感じています。

次は、麻酔科を回らせていただきました。気管挿管、静脈路確保、A line確保、腰椎穿刺等、多くの手技を学ばせていただきました。また、人工呼吸器等多くの機械の使用法や、患者さんのバイタルサインの変動に目を光らせ、それに対応する薬剤の使用法を学ぶことが出来ました。

今現在は、救急外来を回らせていただいております。軽症から重症まで様々な患者さんが運ばれてきますが、first touchから検査、そして各科の先生へのコンサルトまでさせて頂いております。多種多様な科の患者さんを診察することができるため、今後の研修生活、また、当直業務にしっかり生かせるよう学んでいきたいと思っております。

最後になりましたが、上級医の先生、コメディカルの方々、2年目の先輩、そして同期のおかげで充実した研修医生活を送れていると感じております。これからもご迷惑をおかけすることも多いと思っております。どうかご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

研修のご案内

第67回 症状・疾患別シリーズ（会員制）

〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕

日時▶平成28年12月3日（土）15：00～17：30

場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

座長：魚返外科胃腸科医院 院長

魚返英寛 先生

演題：「胃癌治療の最前線」

1. 胃癌の内視鏡治療

熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学助教

庄野 孝 先生

2. 胃癌の外科治療

国立病院機構熊本医療センター外科医長

岩上志朗

3. 胃癌の化学療法

国立病院機構熊本医療センター腫瘍内科部長

境 健爾

この講座は有料で、年間10回を1シリーズ（年会費10,000円）として会費制で運営しています。但し、1回だけの参加を希望される場合は1回会費2,000円で参加いただけます。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター事務局

TEL 096-353-6501（代表）内線2630 096-353-3515（直通）FAX 096-352-5025（直通）

第183回 三木会（無料）

（糖尿病、高脂血症、高血圧を語る会）

〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕

〔日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位〈2群〉0.5単位認定〕

日時▶平成28年12月15日（木）19：00～20：45

場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室2

1. 「糖代謝異常と痙攣」

国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科医長

木下博之

2. 「糖尿病における脂質代謝異常の特徴とその治療的意義」

熊本大学医学部附属病院 糖尿病・代謝・内分泌内科 講師 松村 剛 先生

なお、興味のある症例、疑問・質問のある症例がございましたら、お持ちいただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長 西川 武志 TEL 096-353-6501（代表）内線5441

第214回 月曜会（無料）

（内科症例検討会）

〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕

日時▶平成28年12月19日（月）19：00～20：30

場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室2

1. 内科症例検討 診療で遭遇した興味ある症例の検討を行います。

「第1症例 意識障害の一例」

国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科

荒木裕貴

「第2症例 呼吸器内科からの症例」

国立病院機構熊本医療センター呼吸器内科医長

名村 亮

2. ミニレクチャー「偽膜性大腸炎について」

国立病院機構熊本医療センター消化器内科

中垣貴志

日頃、疑問の症例、興味のある症例、X線、心電図、その他がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター統括診療部長 清川 哲志 TEL：096-353-6501（代表）FAX：096-325-2519

地域医療連携室直通電話をご利用下さい

先生方には日頃より患者様の御紹介を頂きありがとうございます。

地域医療連携室には直通電話がございます。

この直通電話は、関係医療機関の皆様から頂くお電話のみをお受け致します。患者様からの直接のご相談は、これまでどおり代表電話を通じて承っております。

医療機関の皆様のための直通電話になります。ホームページ等では公表いたしておりませんので、ご了承下さい。

今後ともよろしくお願い申し上げます。

地域医療連携室直通電話 096-353-6693

月～金（祝日を除く）AM 8：30～PM 5：00



2016年 研修日程表 12月

国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

12月	研修センターホール	研 修 室
1日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「病理診断科からのフィードバック」 国立病院機構熊本医療センター病理診断科部長 村山寿彦	
2日(金)		
3日(土)	15:00~17:30 第67回 症状・疾患別シリーズ 「胃癌治療の最前線」 [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定] 座長 魚返外科胃腸科医院 院長 魚返英寛 先生 1. 胃癌の内視鏡治療 熊本大学大学院生命科学研究部消化器内科学助教 庄野 孝 先生 2. 胃癌の外科治療 国立病院機構熊本医療センター外科医長 岩上志朗 3. 胃癌の化学療法 国立病院機構熊本医療センター腫瘍内科部長 境 健爾	
4日(日)		
5日(月)		
6日(火)		
7日(水)		
8日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「急性腎不全と緊急透析の適応」 国立病院機構熊本医療センター腎臓内科部長 富田正郎	
9日(金)		
10日(土)	13:00~15:30 第143回 公開看護セミナー 医療コミュニケーション② 「患者がやる気スイッチを見つけるコミュニケーション ～もっと話したいと思われるあなたになる伝え方～」 講師 Clear Communication代表 藤田菜穂子 先生	
11日(日)		
12日(月)		
13日(火)		
14日(水)		
15日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「糖尿病について」 国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長 西川武志	19:00~20:45 第183回 三木会(研2) (糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定] [日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定]
16日(金)		
17日(土)		
18日(日)	13:00~17:00 公開肝臓病教室	
19日(月)		19:00~20:30 第214回 月曜会(内科症例検討会)(研2) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定]
20日(火)		
21日(水)	14:00~15:00 第45回 市民公開講座 「過活動膀胱って何?」 国立病院機構熊本医療センター泌尿器科医長 前田喜寛	
22日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 「血液データの見方」 国立病院機構熊本医療センター血液内科部長 日高道弘	
23日(金)		
24日(土)		
25日(日)		
26日(月)		
27日(火)		
28日(水)		
29日(木)		
30日(金)		
31日(土)		

研1~3 2階研修室1~3

※二の丸モーニングセミナーにつきまして、詳細はホームページ(<http://www.nho-kumamoto.jp/>)をご参照ください。

問い合わせ先 〒860-0008 熊本市中央区二の丸1番5号 国立病院機構熊本医療センター2階 地域医療研修センター TEL 096-353-6501(代) 内線2630 096-353-3515(直通)